＜専門分野＞

成人看護学実習

（慢性疾患・機能障害のある人の看護）

目　　的

成人期にある対象を生活者として統合的に理解し、慢性疾患・機能障害をもつ人の、健康レベルとニーズに応じた看護実践能力を養う。

目　　標

１．回復期・慢性期にある対象を身体的・精神的・社会的側面から統合的に理解できる。

２．現在に至るまでの健康障害の経過を捉え、病態や治療・検査に伴う症状および合併症予防に向けた援助が理解できる。

３．健康障害に伴う生活への影響を理解し、対象の意志を尊重しながら機能低下や変化に応じた援助が安全・安楽に実施できる。

４．家族の存在と特徴について理解できる。

５．対象および家族に、安定した病状やその人らしさの生活を維持するための、セルフケア獲得に向けた支援ができる。

６．対象を尊重する態度を身につけ、援助関係を築くことができる。

７．対象を支えるための多職種連携・調整の実際を学ぶ。

内　　容

<table>
<tr><th>経過</th><th colspan="2">内容</th><th colspan="2">対象選定の目安</th></tr>
<tr><th rowspan="2">回復期・慢性期</th><th>対象</th><th>看護のポイント</th><th>症状</th><th>疾患</th></tr>
<tr><td>身体機能および生活行動に障害のある人</td><td>1．苦痛の緩和
2．障害の拡大防止
3．合併症の予防
4．身体機能の障害に伴う、諸機能・生理的ニードの変化に応じた援助
5．日常生活行動自立への援助
6．安全を保つための援助
7．障害受容過程への援助
8．社会資源の活用と多職種との連携</td><td rowspan="2">疼痛
呼吸困難
胸水、浮腫
胸痛、不整脈
咳嗽、喀痰
高血圧
食欲不振、腹部膨満
腹痛、吐血、下血
黄疸、貧血、倦怠感
易感染、出血傾向
内分泌・代謝機能障害
掻痒感
排尿障害、尿毒症
水・電解質異常
高次脳機能障害
運動麻痺、運動失調
筋力低下、神経麻痺
循環障害、関節拘縮
皮膚潰瘍
……など</td><td rowspan="2">虚血性心疾患
慢性心不全
慢性閉塞性肺疾患
気管支喘息、肺炎
胃・十二指腸潰瘍
肝硬変、クローン病
潰瘍性大腸炎、糖尿病
慢性膵炎、慢性肝炎
腫瘍（肺、消化器系、乳腺、上顎、喉頭、甲状腺、腎・泌尿器系、皮膚）
悪性リンパ腫、白血病、骨異形成症候群
脳血管性疾患、脳腫瘍
骨折、頸椎・腰椎疾患、肩腱板損傷・断裂、股・膝関節疾患
脊髄損傷、四肢切断、慢性関節リウマチ
神経難病
褥瘡、熱傷　……など</td></tr>
<tr><td>長期的に病と共に生活を営んでいくことが必要な人</td><td>1．苦痛の緩和
2．寛解・維持、合併症の予防
3．疾病受容過程への援助
4．セルフケアの獲得と継続に向けた援助
5．社会資源の活用と多職種との連携</td></tr>
</table>

方　　法

1．実習開始前に、学内にてオリエンテーションを受ける。

2．学内実習

ねらい：受け持ち患者の状態に応じた看護技術を習得するとともに、患者の理解を深め、臨地実習に備える。

1）病棟実習開始前に、実習グループごとに行う。

2）受け持ち患者の看護を実践するうえで必要な技術を選択し、患者の状態を考慮した演習計画を立案し実施・評価する。

3．病棟実習

1）病棟オリエンテーションを受ける。

2）看護のポイント及び対象選定の目安に、該当している１名の対象を受け持ち患者とする。

3）立案した看護計画に基づいて看護を実践する。

4）１場面について、プロセスレコードを記載する。

5）テーマカンファレンスを開催する。

6）実習終了後は、看護のポイントを踏まえ、「学んだことと今後の課題」について実習レポート用紙に記載する。

成人看護学実習　評価表

実習病棟　　階　　病棟　　実習期間　　月　　日～　　月　　日　　番　学生氏名

項目	評定尺度	評定	
1．発達段階とライフスタイルについて理解できる。	対象の発達段階と生活習慣・健康観について個別性を述べられる。	A	4
	対象の発達段階と生活習慣・健康観について個別性をだいたい述べられる。	B	3
	対象の発達段階と生活習慣・健康観について個別性を少しでも述べられる。	C	2
	対象の発達段階と生活習慣・健康観について述べられない。	D	0
2．対象の健康障害を理解できる。	対象の健康障害について、病態生理・検査・治療などの事実を整理し、だいたい解釈を加えながら述べられる。	A	4
	対象の健康障害について、だいたい病態生理・検査・治療などの事実を整理し、少しでも解釈を加えながら述べられる。	B	3
	対象の健康障害について、少しでも病態生理・検査・治療などの事実を整理し、少しでも解釈を加えながら述べられる。	C	2
	対象の健康障害を述べられない。	D	0
3．健康障害が生活に及ぼす影響を理解できる。	対象の健康障害が生活に及ぼす影響を、現時点および長期的視点でだいたい述べられる。	A	4
	対象の健康障害が生活に及ぼす影響を、現時点および長期的視点で少しでも述べられる。	B	3
	対象の健康障害が生活に及ぼす現時点の影響を述べられる。	C	2
	健康障害が生活に及ぼす影響を述べられない。	D	0
4．セルフケアの必要性を判断できる。	対象の健康障害や状態に応じたセルフケアの必要性を述べられる。	A	4
	対象の健康障害や状態に応じたセルフケアの必要性をだいたい述べられる。	B	3
	対象の健康障害や状態に応じたセルフケアの必要性を少しでも述べられる。	C	2
	対象の健康障害や状態に応じたセルフケアの必要性を述べられない。	D	0
5．障害・疾病の受容過程を理解できる。	障害・疾病による現在の対象の心理状態とその変化の過程がだいたい述べられる。	A	4
	障害・疾病による現在の対象の心理状態がだいたい述べられ、その変化の過程が少しでも述べられる。	B	3
	障害・疾病による現在の対象の心理状態が少しでも述べられる。	C	2
	障害・疾病による対象の心理状態が述べられない。	D	0
6．対象を支える人々の存在とその役割が理解できる。	対象を支える人々の存在と、対象に及ぼす影響が述べられる。	A	4
	対象を支える人々の存在と、対象に及ぼす影響がだいたい述べられる。	B	3
	対象を支える人々の存在と、対象に及ぼす影響が少しでも述べられる。	C	2
	対象を支える人々の存在と、対象に及ぼす影響述べられない。	D	0
7．基本的欲求の充足・未充足の判別ができる。	情報を標準・平均・正常性・日常性と照合・比較し、充足・未充足を判別できる。	A	4
	情報を標準・平均・正常性・日常性とだいたい照合・比較し、充足・未充足を判別できる。	B	3
	情報を標準・平均・正常性・日常性と少しでも照合・比較し、充足・未充足を判別できる。	C	2
	情報を標準・平均・正常性・日常性と照合・比較できず、充足・未充足を判別できない。	D	0
8．基本的欲求の未充足の原因・誘因を、体力・意思力・知識の側面から判断できる。	未充足の状況を「基本的欲求に影響を及ぼす常在条件」「基本的欲求を変容させる病理的状態」と関連づけて解釈し、原因・誘因を３側面から判断できる。	A	4
	未充足の状況を「基本的欲求に影響を及ぼす常在条件」「基本的欲求を変容させる病理的状態」と関連づけて解釈し、原因・誘因を３側面からだいたい判断できる。	B	3
	未充足の状況を「基本的欲求に影響を及ぼす常在条件」「基本的欲求を変容させる病理的状態」と関連づけて解釈し、原因・誘因を３側面から少しでも判断できる。	C	2
	未充足の状況を「基本的欲求に影響を及ぼす常在条件」「基本的欲求を変容させる病理的状態」と関連づけて解釈できず、原因・誘因を３側面から判断できない。	D	0
9．分析した結果から、対象の全体像を捉えられる。	起きている事象とその因果関係及び今後の成り行きについて身体・心理・社会的側面から整理できる。	A	4
	起きている事象とその因果関係及び今後の成り行きについて３側面からだいたい整理できる。	B	3
	起きている事象とその因果関係及び今後の成り行きについて３側面から少しでも整理できる。	C	2
	起きている事象とその因果関係及び今後の成り行きについて３側面から整理できない。	D	0
10. 望ましい姿を設定できる。	対象にとっての望ましい生活を捉えて述べられる。	A	5
	対象にとっての望ましい生活をだいたい捉えて述べられる。	B	4
	対象にとっての望ましい生活を少しでも捉えて述べられる。	C	3
	対象にとっての望ましい生活を捉えて述べられない。	D	0
11. 看護上の問題を特定し表現できる。	原因・誘因が明らかで、根拠の明確な看護上の問題が述べられる。	A	4
	だいたい原因・誘因が明らかで、根拠の明確な看護上の問題が述べられる。	B	3
	少しでも原因・誘因が明らかで、根拠の明確な看護上の問題が述べられる。	C	2
	看護上の問題が述べられない。	D	0

項目	評定尺度	評定	
12. 対象の期待される結果とその時期を設定できる。	対象の期待される結果とその時期について、RUMBA の法則を活用して述べられる。	A	5
	対象の期待される結果とその時期について、RUMBA の法則を活用しているがやや抽象的に述べている。	B	4
	対象の期待される結果とその時期について、RUMBA の法則を活用せずに述べている。	C	3
	期待される結果が看護問題と一致していず、時期も述べられない。	D	0
13. 対象の状態を考慮した解決策が述べられる。	対象の状態を考慮して５W１H で解決策を述べられる。	A	5
	対象の状態を考慮した解決策をだいたい述べられる。	B	4
	少しでも対象の状態を考慮して解決策を述べられる。	C	3
	対象の状態を考慮した解決策が述べられない。	D	0
14. 対象に必要な援助が実施できる。	計画や日々のアセスメントに基づいて実施できる。	A	5
	だいたい計画や日々のアセスメントに基づいて実施できる。	B	4
	少しでも計画や日々のアセスメントに基づいて実施できる。	C	3
	対象に必要な援助を実施できない。	D	0
15. 対象の反応を捉え安全・安楽に実施できる。	対象の反応を捉え安全・安楽に実施できる。	A	5
	だいたい対象の反応を捉え安全・安楽に実施できる。	B	4
	少しでも対象の反応を捉え安全・安楽に実施できる。	C	2
	安全・安楽に実施できない。	D	0
16. 計画に基づいて実施した援助を評価・修正できる。	援助行為の結果と期待される結果を関連付けて評価し、解決策をだいたい修正できる。	A	5
	援助行為の結果と期待される結果を関連付けてだいたい評価し、解決策をだいたい修正できる。	B	4
	援助行為の結果と期待される結果を関連付けて少しでも評価し、解決策を少しでも修正できる。	C	2
	援助行為の結果と期待される結果を関連付けて評価できない。	D	0
		合計	/70

《態度》

項目			評価のポイント	A	B	C	D
前に踏み出す力	1	主体性	・ 指示を待つのではなく自らやるべきことを見つけ、積極的に取り組める	4	3	2	1
	2	実行力 働きかけ力	・わからないことをそのままにせず、タイムリーに指導者や教員、スタッフ、実習メンバーなどに確認し、解決に向けて取り組むことができる ・患者によりよい援助を実施するために、指導者や教員、実習メンバーなどに働きかけることができる ・積極的に技術を習得できる	4	3	2	1
考え抜く力	3	課題発見力 計画力 創造力	・ 実習を客観的に振り返り、自己の課題を述べることができる ・ 課題解決に向けた案を複数考え、それを遂行するための準備ができる ・ 実習全体および日々のスケジュールを常に把握し、優先順位を考えて行動できる ・ よりよい援助の方法を探求している	5	3	2	1
チームで働く力	4	発信力 情況把握力	・ 状況や目的に応じて自分の考えを整理し、他者にわかりやすく簡潔に伝えることができる ・ 自分のできること、できないことを判断し対象、実習メンバー、実習指導者、教員、スタッフなどの状況を踏まえた行動ができる	4	3	2	1
	5	傾聴力 柔軟性	・ 他者の意見や立場を尊重できる ・ 指導者や教員、実習メンバーからの意見や助言を最後まで聞き、相手の意見を正確に理解できる ・ 相手にとって話しやすい状況をつくり、相手の意見を引き出している	4	3	2	1
	6	規律性 ストレスコントロール力	・ 様々な場面で良識やマナーの必要性を理解し、ルールを守ることができる ・ 周囲に迷惑をかけたとき、誠実に対応できる ・ チームの一員と対象への責任をもち、周囲の協力も得ながら心身の体調管理ができる	4	3	2	1
	7	倫理性	・ 対象のプライバシーを守り、個人情報の保護に努めることができる ・ 適切な言葉遣いで、状況に応じた行動ができる ・ 対象を主体とした関わりになっているか常に考え行動できる	5	3	2	1
						合計	/30

＜評定尺度＞ A：少しの指導でできた
B：指導を受けてできた
C：繰り返し指導を受けながらできた
D：繰り返し指導を受けて少しできた

実習指導責任者

担当教員

総合点	